



3月10日(月)、第150回直木賞受賞作「恋歌」<sup>れんか</sup>の著者で、羽曳野市出身の朝井まかてさんが、市長室を訪ねていただきました。



## おめでとうございます!

**北川市長** この度は直木賞受賞、おめでとうございます。私も読ませていただき、しっかりとした歴史的背景に純愛が浮き出る様に重ねられ、本当に心地よい余韻の残る作品だと感じました。出版してすぐに受賞の手ごたえはあったのですか。

**朝井さん** いえいえ。本を出してもらえるだけでありがたいと思って執筆してきましたから、直木賞のことは全く頭になかったんです。受賞できるはずがないと思ってました。逆に今回取れなかったら二度となかったと思います(笑)。候補になり続けること自体が、凄いことなんです。

**北川市長** 受賞作は自身でどのような作品ととらえていますか。自身の成長につながりましたか。



### 「恋歌」

朝井まかて / 著 講談社

幕末から明治にかけての激動の時代を生きた歌人・中島歌子の若き日々を中心に描いた作品

- ・本屋が選ぶ時代小説大賞 2013
- ・第150回直木賞 (2014.2.20)

**朝井さん** これほど史実に材を取った作品は「恋歌」が初めてだったのですが、作品が独り立ちして一人歩きして、結果的に受賞作家にしてもらった、という感覚です。実はね、歴史小説や時代小説を書いた場合、読者さんから「よう勉強しはったなあ、よう調べはったなあ」ってほめられたら、作家の負け、小説の負けという認識があって。(ほめていただくのは嬉しいですが) 物語や登場人物の生きよう、そこに感じていただける書き手になりたいと、今もそう思っています。

## 羽曳野の街が大好き!

**北川市長** 確かに女性に寄り添った物語で、主人公の心情がすどく描かれています。それに、読んでみると自然と情景が思い浮んでくる作品。羽曳野で生まれ育ったことが、作家としての素地を養いましたか。

**朝井さん** はっきりと自覚があります。私が幼いころ、実家の周辺にはまだ田畑が広く残っていました。野から郡戸を通過して小学校へ向かうんですけど、細い一本道の左右が田んぼでね、その風景は今でもはっきりと目に浮かびます。私の実家は愛媛県から移住してきた、いわゆる“よそ者”でしたが、ご近所の皆さんにそれは可愛がっていただきました。物心ついた頃から私は本を読むのが好きだったんですけども、日のあるうちは、田植えや稲刈りの真似事をしてどろんこになって遊んでたんですよ。お百姓さんの仕事に憧れていたんです。れんげ畑もよかつたし、カエルの鳴き声とか。朝、小学校に行く前、東の空をみたら、二上山が

はつきり正面にあって、校歌で歌っているものが本当に目にできたし、いい時代に育ったと思います。植物にまつわる作品をよく書いているのも、子ども時代に身近にあったものだからです。

**北川市長** 子どもの頃に見たものや聞いたこと、感じたことが、豊かな感性を醸成し、作家としての素地になっているんですね。では、学校生活での思い出は。

**朝井さん** いろんな先生が一人ひとりの生徒にいろんな接し方をしてくれました。小学2年の国語の時間に物語を書くことがあったのですが、時間内に書ききれないでいたら、次の算数の時間になっているのに、先生は「書いててもいいよ」と。そのまた次の社会の時間もずっと物語を書き続けました。その体験が今につながっているんです。幸せな時代に育ったなと思いますね。

## 次の作品はぜひ 羽曳野市を舞台に！

**北川市長** その当時から社会状況は大きく変わりましたね。今の子どもたちや生活環境についてどんな印象を持っていますか。

**朝井さん** 子どもも大人も、失敗やしくじりがゆるされない時代になっているのが気になっています。とくに子ども時代はいっぱい失敗することが、人生の背骨になる。自分の可能性を伸ばすために、いやなこと苦手なことを味わったほうがいい。柔軟な時期に、せいぜい失敗させてあげてほしいと思います。それと、私は出張でいろんなとこに伺いますが、駅に降り立ったらどこでもおんなじ風景なんです。あれは残念。ちょっと足を延ばせばもちろん空気は全然ちがうんですが、なにゆえ、駅前があんなに似ているのか。でも、古市はいいですよ。

久しぶりに近鉄電車に乗ったんですが、古市が近づくにつれてブドウ畑が見えて。都市開発はノスタルジーだけでやれるものではないでしょうけれど、願わくば今の風景を残しながら発展して行ってほしいです。

**北川市長** 今後はどのような作品をお考えでしょうか。

**朝井さん** 史実を材にした歴史小説と、エンターテインメント性の高い軽みのある時代小説、この両方をやっていくつもりです。

**北川市長** 羽曳野市を舞台に、人の生活そのものを描きつつ、羽曳野のまちの魅力を引き出すような作品を執筆いただければ嬉しいです。今日お話をうかがい、人が豊かに暮らすための「感性」の大切さと、それを磨くために、次代に引き継がなければならないものがある。そんなことを感じました。これからのご活躍を楽しみにしています。



▲ 羽曳野市史を受け取る朝井まかてさん（左）



### 丹比小学校時代（6年生）の担任だった はたけやま 畠山悦子先生（河原城）

朝井さんからは、「私の広報部長なんです」とお墨付き。直木賞作家の幼少期を「正義感のあるガキ大将」と話し、男子とのとつきみ合いや、5年生から生徒会長を2期務めるなど、貴重なエピソードもお持ちでした。

畠山さんは、教え子の快挙の速報を聞いて「体が震え、涙が出ました。」と話し、「このご縁（受賞）に立ち会えた幸せ者です。」と目を細めました。



▲ 受賞を祝う垂幕（母校の丹比小学校）